九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

縄文時代後期における社会構造の研究 : 広域土器分布現象と「縄文文化の東西差」の検討を通して

福永, 将大

https://hdl.handle.net/2324/2236324

出版情報：九州大学, 2018, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式３）

氏　　名　：福永　将大

論 文 名　：縄文時代後期における社会構造の研究
―広域土器分布現象と「縄文文化の東西差」の検討を通して―

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

縄文時代から弥生時代への変化は、日本列島人類史において画期的なイベントであった。朝鮮半島から水稲農耕文化が伝播し、日本列島各地で狩猟採集から農耕への生業変化が生じた。こうした水稲農耕文化の受容のあり方は、日本列島全域で一様ではないことは興味深い。西日本ではすぐに水稲農耕文化が広がり、狩猟採集から農耕への生業変化が生じたのに対し、東日本では東北北部などで早い段階に水稲農耕文化の広がりが確認されるものの、それが根付くのにはかなりの時間を要している。

縄文時代後晩期の東日本では非常に装飾性の高い土器群を有する文化圏が広がる一方、西日本では装飾性の乏しい土器群を有する文化圏が広がり、対立的な様相を呈している。こうした縄文時代後晩期の東西２大土器分布圏の境界と、先述した水稲農耕文化の受容に差異が生じる文化的境界がおおよそ一致することから、両者は関連づけて論じられてきた。東西２大土器分布圏が見られるのは、縄文時代後期後葉以降のことであり、それ以前の縄文時代後期初頭～前葉は、むしろ東日本と西日本の交流は活発であったことが指摘されている。東西日本の交流が盛んであった縄文後期前半期から、東西の土器文化の差異が強調されるようになる縄文後期後半期への移行プロセス、すなわち縄文後期中葉における列島規模の集団関係・社会関係の変動の実態解明が必要である。

また、上述したような東日本と西日本の文化的差異は、縄文時代において後晩期に限らず、それ以前から見られるものであり、これまで「縄文文化の東西差」と言われてきた。こうした「縄文文化の東西差」発現要因として、これまで資源環境の豊かさとそれに伴う人口規模の差異や、資源環境の差異に伴う人間集団の生業戦略の差異が指摘されてきた。しかし、祭祀的アイテムなどの物質文化に見られる質的差異が生じる要因を考える場合、上述のような＜資源環境と人間集団＞の関係性だけでは議論は不十分であり、＜人間集団と人間集団＞の関係性や集団構成・社会構成のあり方に「東西差」が見られるのかどうかについて、具体的な考古資料から検証する必要がある。

以上を踏まえて、本研究では、①縄文時代後期、特に後期中葉における列島規模の集団関係・社会関係の変動の実態解明、②「縄文文化の東西差」発現メカニズムの実態解明、という大きく２つの研究課題を設定した。これらの課題を解決するために、本研究では、考古資料の中で最も量的・質的にも安定した分析資料数を確保することができ、かつ当時の集団関係・社会関係の復元を行うのに最適な縄文土器を分析対象として選択した。

まず、属性分析の手法でもって縄文時代後期中葉広域土器編年を構築し、縄文時代後期中葉をⅠ段階・Ⅱ段階・Ⅲ段階の３段階に時期区分した（第２章第１節）。そして、構築したタイムスケールに基づいて、分類単位レベル（第２章第２節）、属性レベル（第２章第３節）、器種レベル（第３章）というように、様々な分析レベルから土器の時空間的動態について検討した。さらに、東日本

縄文社会と西日本縄文社会それぞれのケーススタディとして、関東地方と九州地方を対象とし、土器様式構造のレベル差に注意しながら、よりミクロな視点からの土器分析も行っている（第 3 章第 2 節）。

集団関係・社会関係をより具体的に復元するために、関東地方と九州地方を分析対象として集落の検討を行い、居住・生業活動の復元を試みた（第 4 章）。また、土器を媒介とした人・モノ・情報の「移動」現象の実態を明らかにするため、栃木県中根八幡遺跡と大分県法垣遺跡出土土器を対象として高精度胎土分析も行った（第 5 章）。

以上の分析結果を踏まえて、第 6 章では縄文後期社会構造と「縄文文化の東西差」発現メカニズムについて考察をおこなった。第 2・3・5 章における土器の時空間的検討を通して把握した土器分布圏の重層的構造を踏まえて、人・モノ・情報の伝達／受容／拒絶のプロセスをモデル化しつつ、コミュニケーションの質的・量的な差異に着目しながら、縄文後期社会構造モデルを構築した。さらに、第 3・4 章の分析結果より、居住・生業活動や領域性のあり方、集団の系譜意識・アイデンティティの協調の度合いに着目しながら、東日本縄文後期社会と西日本縄文後期社会についてそれぞれモデル化している。

これらの社会モデルをもとに、縄文時代後期の列島史的・人類史的位置づけを行った。縄文後期初頭以来、交流の活発化が見られた東日本と西日本の関係が劇的に変化する画期の時期として、本稿のⅡ段階（加曾利 B2 式・一乗寺 K 式・西平式併行期）を意義付け、「東北系文化要素の影響拡大」と「西日本縄文社会の東日本縄文社会化」の 2 つの現象からその画期の背景について考察した。縄文後期後葉以降に形成されるとされてきた東西 2 大土器分布圏成立の直接的な契機は、このⅡ段階に求めることができ、そこで形成された列島を大きく二分する地域的枠組みが、後の弥生時代の開始・展開まで影響を与え続けたと考えられる。

また、近年、盛んに議論されている縄文階層化社会論について、本研究成果を踏まえた上で見解を示した。本稿における土器の時空間的分析や集落分析の結果のいずれにおいても、社会の階層化の兆候を見出すことは困難であり、縄文時代後期の東日本縄文社会・西日本縄文社会は、ともに典型的な部族社会であったと結論づけた。さらに、東日本縄文後期社会と西日本縄文後期社会において見られた社会・文化的差異については、あくまでも部族社会の枠組みの中での差異であり、E.サーヴィス氏が言うところの「特殊進化」の観点から論じられるべき性格のものであると解釈した。